

## 教材としての W. B. イェイツ — “Among School Children” の場合

藤田 佳也\*

### How to Use W. B. Yeats in Class - “Among School Children”

Yoshiya FUJITA\*  
(Accepted 15 January 2013)

#### はじめに

W. B. イェイツの詩を、「気づきの経験」とそれに続く「考えるという行為の実践」を学生たちに促す、1つの教材として用いる場合、学生たちの気づきと思考を引き出す質問にはどのようなものがあり得るか、本稿ではそれを“Among School Children”について考えてみたい。

詩というジャンルは、通常、一定の形があるという点において、「気づきの経験」を実現させるうえで適している面があるといえる。では、詩の技法、そして文学的な表現方法に対する気づきをいかにして促すことができるか。それは、適切な場面で適切な質問を提示することにかかっているといえる。それでは“Among School Children”の場合、どのような質問が考えられるだろうか。

#### 1. 改行することで意味はどう変わる？

##### I

I walk through the long schoolroom question-  
ing;  
A kind old nun in a white hood replies;  
The children learn to cipher and to sing,  
To study reading-books and histories,  
To cut and sew, be neat in everything  
In the best modern way - the children's eyes  
In momentary wonder stare upon  
A sixty-year-old smiling public man. (ll. 1-8)

センテンスの途中であっても改行することがある、というのが詩の1つの大きな特徴であるが、まずはその効果に学生たちの目を向けさせたい。第I連においては、“be neat in everything” (5)、“in

the best modern way” (6) という2つの誇張表現が、改行をはさんで並べられている。「改行することで意味はどう変わるか？」これが最初の質問である。ここでは、類似の誇張表現が改行によって分けられ、行末と行頭に置かれることで、「誇張」という行為が前景化され、修道女が自分の学校を自画自賛する態度が強調される効果をもっているといえる。微笑を浮かべた老視察官が、優しげな修道女から説明を聞いている、という平穏な雰囲気の後背に、語り手のアイロニカルな態度が透けて見える。

改行の効果で、もう1つ重要なものは、情報提示を遅らせることによるサスペンスの効果である。7-8行目においては、カメラが老視察官にグッと寄り添って行くかのような印象がもたらされており、彼こそがこの詩の主人公であることが、はっきりと示されている。そしてここで、彼の記憶が蘇ってくることになる。

##### II

I dream of a Ledaean body, bent  
Above a sinking fire, a tale that she  
Told of a harsh reproof, or trivial event  
That changed some childish day to tragedy -  
Told, and it seemed that our two natures  
blent  
Into a sphere from youthful sympathy,  
Or else, to alter Plato's parable,  
Into the yolk and white of the one shell.

(ll. 9-16)

第II連では、“a Ledaean body”をもつ、ある女性と彼が、子供だった頃の記憶が語られる。“a sphere”、“the yolk and white of the one shell”と

\* 農食環境学群循環農学類英語圏文化研究室  
English-Speaking Culture Department of Sustainable Agriculture College of Agriculture, Food and Environment Sciences

表されるように、2人の間に共感があった頃の記憶である。

## 2. どうして繰り返されるのか？

### III

And thinking of that fit of grief or rage  
I look upon one child or t'other there  
And wonder if she stood so at that age -  
For even daughters of the swan can share  
Something of every paddler's heritage -  
And had that colour upon cheek or hair,  
And thereupon my heart is driven wild:  
She stands before me as a living child.  
(ll. 17-24)

第III連においては、ある単語・フレーズ・表現が繰り返されることの意味について考えさせたい。「この連において繰り返されている表現は何か？」まずはこの問いから始める。

deixis (発話時・発話場面との関連で指示内容が変わる要素で、人・時・場所を指す代名詞・副詞など)である“that”が繰り返されていることに、学生たちもすぐに気づくだろう。更に、同じくダイクシスである“there”もある。ここで更に質問。「どうして繰り返しダイクシスが用いられているのか？」

これらのダイクシスの役割を整理してみると、“that” (17) は過去あるいは過去の女性，“that” (19,22) は教室の子供たち、そして“there” (18) は現在の教室を、それぞれ指示している。過去と現在という2つの世界の重なりが、deixisの繰り返しによって明確化されている。時間的・空間的に遠いものを表す“that”，“there”が用いられているのは、彼女あるいは彼にとって失われてしまったものに対する距離のためである。

更にここで1つ質問。「過去と現在の重なりについて、それを最も端的に表している1行はどれか？」“She stands before me as a living child.” (24) が、非常に明確な形でそれを示していることは、明らかであろう。

## 3. 他のテキストを読む必要はあるのか？

### IV

Her present image floats into the mind -  
Did Quattrocento finger fashion it  
Hollow of cheek as though it drank the wind  
And took a mess of shadows for its meat?  
And I though never of Ledaean kind

Had pretty plumage once - enough of that,  
Better to smile on all that smile, and show  
There is a comfortable kind of old scarecrow.  
(ll. 25-32)

続く第IV連でも、動詞“float”が用いられていることから、第III連の白鳥のイメージが引き継がれていることがわかる。また、“Quattrocento” (26) という語については、イエイツの *A Vision* に言及があり、「ボッチチェリ、ダヴィンチ等、ルネサンスの芸術家たちは、intellectual beautyを表現した」と記述されている<sup>1</sup>。これらの語の選択から、語り手による女性の偶像化を読みとることができる。

しかし、この偶像は、続く2行における客観的、冷静な認識 (“Hollow of cheek as though it drank the wind / And took a mess of shadows for its meat”)によって打ち砕かれる。自らの期待に裏切られる語り手の姿が、見事に劇化されているといえる。改行によって、理想と現実の落差が強調されていることを、学生たちと確認したい箇所である。

詩の創作年代から、老齡に達した Maud Gonne の姿をこの部分に読みとるべきである、とする一般的な説に対し、Cleanth Brooks は、伝記的偏見を排除し、ここに精神的な美のみを読み取るべきであるとするが<sup>2</sup>、両者とも情報提示の順序がもたらす効果を見落としているといえる。詩の場合には、特に改行によって情報提示は一定の順序をもってなされる。それがもたらす効果について、再度、強調しておく必要があるだろう。

イエイツの “A Bronze Head” にも、改行による情報提示の順序を巧みに利用した同様の例がある。両者とも、モード・ゴンに關係している点でも共通している。

理想と現実の狭間で揺れ動く、イエイツの姿がここにある。

Here at the right of entrance this bronze  
head,  
Human, superhuman, a bird's round eye,  
Everything else withered and mummy-dead.  
(ll. 1-3)<sup>3</sup>

ここでは、先ほどの *A Vision* の例とも合わせて、当該のテキストの意味を探るうえで、他のテキストとの関係が1つの重要な要素であることを、intertextuality という概念と共に理解させたい。

またここで、ブルックスとの関連で New Criti-

cism というものについて、説明しても良いだろう。見方が変われば、意味も変わる。その1つの例として、批評理論・文学理論を挙げることは、効果的であろうと思われる。

#### 4. 注は何のために付いているのか？

##### V

What youthful mother, a shape upon her lap  
Honey of generation had betrayed,  
And that must sleep, shriek, struggle to  
escape  
As recollection or the drug decide,  
Would think her Son, did she but see that  
shape  
With sixty or more winters on its head,  
A compensation for the pang of his birth,  
Or the uncertainty of his setting forth?

(ll. 33-40)

第V連には、“Honey of generation”, “the drug” について、本詩唯一の注が付けられている。

I have taken the ‘honey of generation’ from Porphry’s essay on ‘The Cave of the Nymphs,’ but find no warrant in Porphry for considering it the ‘drug’ that destroys the ‘recollection’ of prenatal freedom. He blamed a cup of oblivion given in the zodiacal sign of Cancer.<sup>4</sup>

この注の目的は、“Honey of generation” と “the drug” が同じものを指し、それが出生以前の記憶を破壊する薬であることを示すことである。しかし、「その根拠はポーフリーには見あたらないと」付け加えることにより、他の解釈を許すものにもなっている。たとえば、“Honey of generation” を “sperm” あるいは “pleasure arising generation” と解釈することも可能であろう<sup>5</sup>。

John Wain は、“Honey of generation had betrayed” と “And that must sleep, shriek, struggle to escape / As recollection of the drug decide” を “youthful mother” にかかっているとし、“Honey of generation” を性的な意味に、“the drug” を麻酔薬ととる<sup>6</sup>。“the pang of his birth” と “the uncertainty of his setting forth” の主体が、内容的にも、文法的にも、母親とも赤ん坊ともとれるという事実が、この解釈に妥当性を与えている。

注は意味を明確化するために付けられる、という前提を逆手にとり、注により意味を複雑化・曖昧化・重層化する。表すと同時に隠す、という詩人の複雑な態度、またそれを可能にする言語というものの振る舞いについて、学生たちに実感させたいところである。

#### 5. 再び、繰り返すとどうなるのか？

##### VI

Plato thought nature but a spume that plays  
Upon a ghostly paradigm of things;  
Solider Aristotle played the taws  
Upon the bottom of a king of kings;  
World-famous golden-thighed Pythagoras  
Fingered upon a fiddle-stick or strings  
What a star sang and careless Muses heard:  
Old clothes upon old sticks to scare a bird.

(ll. 41-48)

第VI連では、3人の哲学者、プラトン、アリストテレス、ピタゴラスが “Old clothes upon old sticks to scare a bird.” と、結局、老いによって敗北したものとして戯画化される。類似の動詞が “plays”, “played”, “Fingered” と繰り返されていることで、3人の共通性が示されている。

一方で、3人の描かれ方は微妙に異なってもいる。プラトンについては “ghostly”, “played the taws / Upon the bottom of a king of kings” と明らかに否定的な描写がなされ、アリストテレスについても “World-famous golden-thighed” と、哲学者の形容詞としては極めて場違いなハイフン付きの形容詞が繰り返されることで、皮肉なトーンが強調されている。しかし、ピタゴラスの描写における “Fingered upon a fiddle stick or strings / What a star sang and careless Muses heard” には、ピタゴラスに対する肯定的な態度がうかがえる。類似の表現を繰り返すことにより、同一化と差別化という相反する2つのことを同時に行う。「繰り返し」が多様な役割を果たす技法であることがわかる。

#### 6. そこにありもしないものに呼びかけるのはどんな時か？

第VII連では、apostrophe (頓呼法) について考えてみたい。「頓呼法 (とんこほう、または呼びかけ、Apostrophe) とは、語り手または作者が語りを休めて、そこに存在しない人物または抽象的な属性や概念に直接語りかける、感嘆の修辭法のこと。戯曲や

詩の中では、「O」という言葉(感嘆詞の「Oh」とは混同しないこと)とともに始まることが多い。語源はギリシャ語の「ἀποστροφή, apostrophé」(背を向ける)とのウィキペディアの説明に、第Ⅶ連の実例はぴったりと当てはまる。

### VII

Both nuns and mothers worship images,  
But those the candles light are not as those  
That animate a mother's reveries,  
But keep a marble or a bronze repose.  
And yet they too break hearts - O Presences  
That passion, piety or affection knows,  
And that all heavenly glory symbolise -  
O self-born mockers of man's enterprise;  
(ll. 49-56)

語り手はこれまで、徐々にその話題を一般的、抽象的、超自然的なものへと移してきたが、ここでは、心の安息をついに宗教的“images”に求める。修道女たちが崇める“images”は、決して老いることがないという点で“mother's reveries”をかき立てた赤ん坊とは異なっている。それゆえ、「年齢」「労働・産みの苦しみ」といった問題を解決する宗教的“images”は語り手を満足させるはずのものだが、語り手は、それらが生命のない死んだ“images”であること、また、それらの完全性が逆に自らの不完全性をはっきりと認識させることから、再び、思索へと戻っていく。語り手の心の揺れ動きを、“But ... not ... But ... and yet”という、繰り返される「逆接」と「否定」の表現が、非常に明確に示している。そして、語り手は、これまで出てきた様々な“images”に「背を向け」、究極の实在に向かって“O Presences”と呼びかけることになる。文学特有の表現であるアポストロフィーが発せられる心理的な状況を、極めて具体的な形で理解できる例である。

#### 7. ambiguityはどこから生じるのか？

### VIII

Labour is blossoming or dancing where  
The body is not bruised to pleasure soul.  
Nor beauty born out of its own despair,  
Nor blear-eyed wisdom out of midnight oil.  
O chestnut-tree, great-rooted blossomer,  
Are you the leaf, the blossom or the bole?  
O body swayed to music, O brightening  
glance,

How can we know the dancer from the  
dance?  
(ll. 57-64)

最終連では、究極の实在として「木」と「踊り子」のヴィジョンが展開される。しかし、その意味は曖昧である。通常は、コンテキストが意味を限定するはずだが、複数の意味を許容するコンテキストが存在していることがその理由である。意味を確定することの難しさ、そして意味を探ることの楽しさを最後に学生たちと確認したい。

“Labour is blossoming or dancing”という表現は、“labour”がコンテキストから「労働」と「産みの苦しみ」という2つの意味をもっていること、主語と動詞の組み合わせが日常的な表現とは違い、奇想(conceit)とも呼ぶべき表現になっていることから、その意味が重層的なものとなっている。

また、“where”以下の条件“The body is not bruised to pleasure soul. / Nor blear-eyed wisdom out of midnight oil”は、この理想的な状態が、我々の生きる現実世界においては実現の難しいものであることを示しており、“blossoming”と“dancing”が現在分詞であることは、たとえそれが実現したとしても、一時的なものであることを暗示している。

このことが大きく影響を与えるのが、“Are you the leaf, the blossom or the bole?” “How can we know the dancer from the dance?”という2つの疑問文を、修辞疑問文ととるのか、それとも単純な疑問文ととるのか、という点である。修辞疑問文ととった場合、肉体と精神、主体と客体、行為と成果といったものが矛盾なく融合している状態を表していることになる。

Frank Kermodeは、これら2つの疑問文を修辞疑問文であるとし、イエイツのシンボルが目指すのは、ロマン派の詩人によく見られるように、行動と思考などの対立を和解させることである、と説明する<sup>7</sup>。

一方、Paul de Manは、これら2つの疑問文を単純な疑問文であるとする。“dancer”は、物質的な生成の世界における現実の女性を写した“image”であるのに対し、“dance”は聖なるものを表現するための“emblem”であり、違うカテゴリーに属するものである。この詩のテーマは、自然と超自然の和解しがたい対立であり、最終行は、根源的に一致することのないシニフィアンとシニフィエを同一視してしまうという誤りを避けることが可能になるような、両者の区別の方法を求める単純疑問文である。これがド・マンの解釈である<sup>8</sup>。

"Among School Children"には、草稿が残っている。

Topic for poem-School children and the thought that live [life] will waste them perhaps that no possible life can fulfill our dreams or even their teacher's hope. Bring in the old thought that life prepares for what never happens.<sup>9</sup>

Curtis B. Bardford は、草稿から完成された詩への変化を以下のように説明する。

"Among School Children" loses its nostalgic tone during its course and becomes one of Yeats's most powerful statements of Unity of Being. The subject of "Among School Children" fails notably even to suggest the great poem that grew out of it.<sup>10</sup>

しかし、これまでの読みからもわかるように、この詩は、草稿にあった "nostalgic tone" を失っていないし、"Yeats's most powerful statements of Unity of Being" にもなっていない。Thomas Parkinson も説明するように、最後の疑問文は、"a question that is neither answerable nor rhetorical but denotative of a desire, a fulfillment, and the impossibility of that fulfillment" である<sup>11</sup>。究極の実在とは、まさに "self-born mockers of man's enterprise" と呼ぶべきものであった。最終行の問いに関して、その解釈は読者に委ねられている。それは、第 V 連以降、姿を消していた代名詞 "I" が、ここにおいて "we" となっていることからわかる。"questioning / replies" と、疑問と返答の rhyme word で始まるこの詩は、返答のない問いで、開かれたまま閉じられる。この詩の open-ended な構造が、形の上からもはっきりと確認できるといえるだろう。

最後に、再度、インターテクスチュアリティという観点から、イェイツの 2 つの文章を引用したい。

Unlike the rhetoricians, who get a confident voice from remembering the crowd they have won or may win, we sing amid our uncertainty: and, smitten even in the presence of the most high beauty by the knowledge of our solitude, our rhythm shudders.<sup>12</sup>

Man can embody truth but he cannot know it.<sup>13</sup>

最も気高い美を目の前にしながらも、孤独の認識にさいなまれつつ、不確かさのなかで、決して知ることのできない真理を震えるリズムで具現化する。それこそがイェイツの詩学であった。

## 8. む す び

以上、W. B. イェイツの詩を、「気づきの経験」とそれに続く「考えるという行為の実践」を学生たちに促す 1 つの教材として用いる場合、学生たちの気づきと思考を引き出す質問にはどのようなものがあり得るか、本稿ではそれを "Among School Children" について考えてきた。それらの質問は、改行、繰り返し、インターテクスチュアリティ、アポストロフィー、アンビギュイティといった、詩あるいは文学の重要な特質と結びつくものとなった。これらの特質についての考察は、文学という枠組みを越えて、物事の考え方というものについても、様々なことを教えてくれる。文学教育が果たすべき役割の一端が、ここに見えてくるといえるのではないだろうか。

## 註

- 1 Yeats, W. B. *A Vision*. London: Macmillan, 1937. 292-3.
- 2 Brooks, Cleanth. *The Well Wrought Urn: Studies in the Structure of Poetry*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1947. 183.
- 3 Yeats, W. B. *The Collected Poems of W. B. Yeats*. London: Macmillan, 1950. 382.
- 4 Yeats, W. B. *The Collected Poems of W. B. Yeats*. 538.
- 5 Yeats, W. B. *Essays and Introductions*. London: Macmillan, 1954. 88.
- 6 Wain, John. *Interpretations*. London: Routledge & Kegan Paul, 1965. 209.
- 7 Kermode, Frank. *The Romantic Image*. London: Routledge & Kegan Paul, 1957. 43-8.
- 8 de Man, Paul. *The Rhetoric of Romanticism*. New York: Columbia UP, 1984. 200-3.
- 9 Jeffares, A. Norman. *A New Commentary on the Poems of W. B. Yeats*. London: Macmillan, 1984. 251.
- 10 Bradford, Curtis. B. *Yeats at Work*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1965. 4.

- <sup>11</sup> Parkinson, Thomas. *W. B. Yeats: The Later Poetry*. Berkeley: California UP, 1964. 108. 1959. 331.
- <sup>12</sup> Yeats, W. B. *Mythologies*. London: Macmillan, London: Rupert Hart-Davis, 1954. 992. <sup>13</sup> Yeats, W. B. *The Letters of W. B. Yeats*.

#### summary

When we use a literary text in class as a means to help the students to have the experience of noticing followed by the act of considering, we should ask them adequate questions at adequate times. In “Among School Children” our questions can be about “new line,” “repetition,” “intertextuality,” “notes,” “apostrophe,” “ambiguity,” and so on. These questions are all related not only with Yeats’s techniques as a poet or his poetics, but also with the important characteristics of poetry or literature. Moreover, they can help the students to learn how to consider beyond literature.